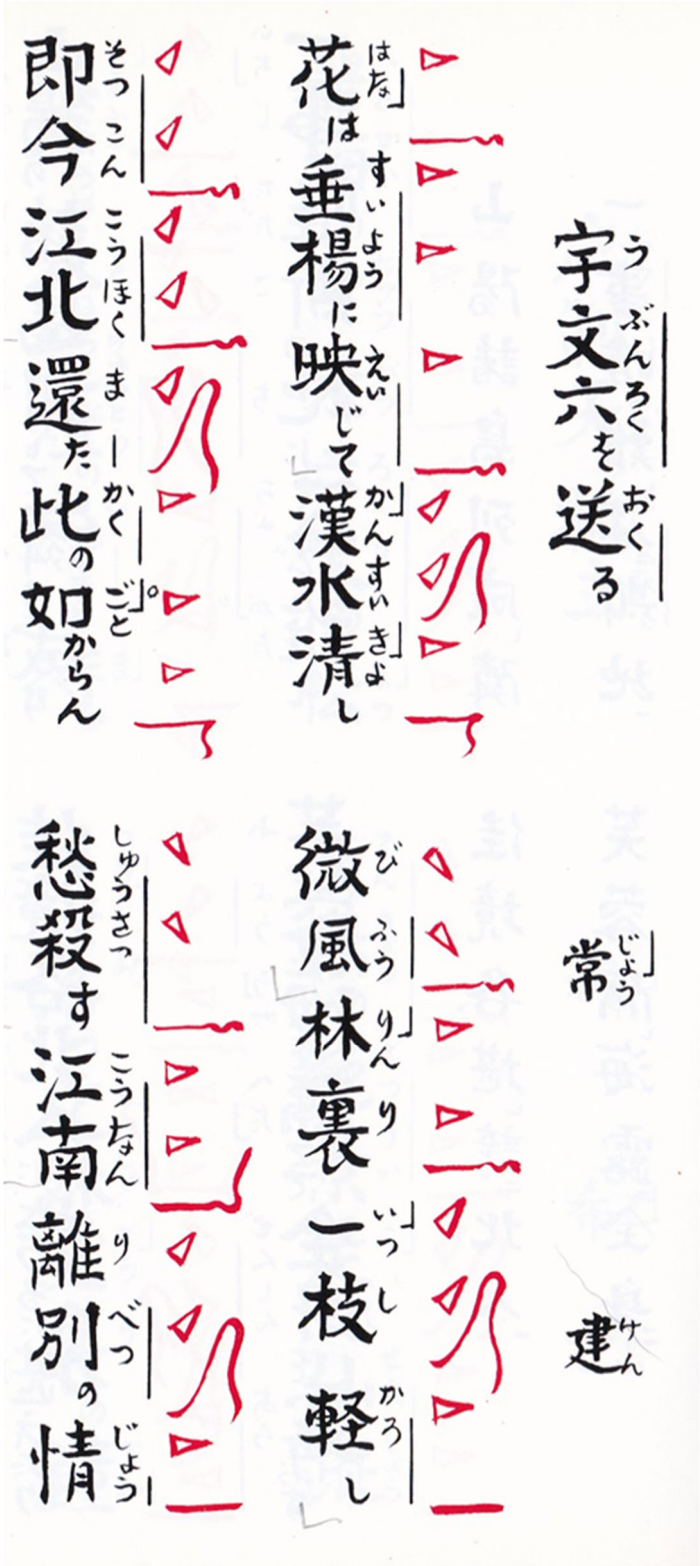

【作者】常　建（七〇八～不詳）盛唐の詩人。字は休文。開元年間の人。開元十五年進士となる。進士となるも、致仕。放浪の後、鄂渚（がくしょ）に隠居す。この鄂渚（がくしょ）とは、地名なのか、場所を表す言葉（湖北省の水郷地帯の意）なのか、目下不明。

【語釈】＊送宇文六…宇文六を見送る。宇文六は名前。宇文家の六番目の男子。宇文（うぶん）は復姓。六は排行。

＊花…恐らく赤い花。　＊映…はえる。照り映える。　＊垂楊…しだれやなぎ。　＊漢水…現在の武漢（漢口、漢陽）で長江に合流する川の名。陝西省に発して、湖北省襄陽、襄樊を経て漢口に至る大河。　＊微風…そよ風。かすかに吹く風。　＊林裏…林の中（から）。木の茂み（から）。　＊一枝…一本の枝。　＊軽…軽やかである。　即今…目下。只今。　・江北…「長江の北側」の地方。宇文六がこれから向かう所になる。　＊還…なおもまた。また。　・如此…このようである。かくのごとし。

＊・愁殺：ひどく愁えさせる。うれえる。悲しむ。　＊江南…普通は長江下流の南岸一帯の風光明媚で、気候が温和で、物産が豊かな江南地方を指すが、ここでは、「川の南」「長江の南側」の意で使っている。作者が留まっている所であり、現在二人が別れを告げようとしている所になる。　＊離別情：別れの思い。

【通釈】赤い花は、緑色のしだれやなぎに映えて、漢水の流れは清らかであり。そよ風が林の中から吹いてきて、一本の枝を軽やかに揺らした。目下の江北もまたこのようのどかな春景色の中にあるのだろう。ここ、江南の地で、別離の思いにひどく愁えている。